

市長記者会見記録

日時：2017年10月3日（火）14時02分～14時33分

場所：第3庁舎18階 講堂

議題：市政一般

<内容>

<<川崎市長選について>>

司会： ただいまより市長記者会見を始めます。本日の議題は市政一般となっております。

それでは、質疑の進行につきましては、幹事社様、よろしくお願いいたします。

幹事社： 幹事社です。よろしくお願いいたします。

今日が1期目の締めくくりの市長会見ということで、この4年間、1期目の総括としてお決まりの質問をさせていただきます。市長として最も印象に残った、この4年間頑張ったことというのはいかがでしょう。

市長： 一番頑張ったことですか。市民の要望の高かった子育て支援策というものに危機感を持って、全庁を挙げて全力で取り組んできたということだと思います。

幹事社： 4年前、公約で、やり残したな、残念だったなと思うことはどんなことでしょうか。

市長： 細かいところでは、いわゆる文化専門官みたいなものはありますけれども、しかしそこでは、公約の意図していたものには、次に繋げなくちゃいけない、違った形で繋げなくちゃいけないという意味では、そんなに何か取りこぼしている感はないので、市民との約束についてはやり切った感があります。

一方で、やっぱり課題はより複雑になってきている。昨日もお話いたしましたけれども、非常に複雑な問題が川崎市内にもたくさんあるので、それに向けての、引き続きチャレンジというものは、していかなければならないなとは思っています。

幹事社： 自己採点をするとしたら、100点満点で何点ぐらいでしょう。

市長： これは、ずっと言っているんですが、自己採点はしないことにしております。市民の皆様にお任せをしたいと思います。

幹事社： 2期目の喫緊の課題、2期目に当選したとしてですね、2期目の喫緊の課題を二、三点挙げてください。

市長： まず1つは、引き続きでありますけれども、これだけ若年層の人口が伸びて

いますので、各種の子育て支援策を、引き続き力を入れて取り組むということと同時に、超高齢社会に向けて、ケアの必要な人たちが増えていますので、そういった意味での地域包括ケアシステムの確立というものを、地域住民の皆さんと、各区の特性に合った形でしっかりと確立することだと思っています。

それから、やっぱりこういった行政サービスを提供していく上で最も必要なのは、税源ということになりますので、その税源培養という意味での産業政策というものをこれまで以上に力強く進めていきたいと思っています。

幹事社： ありがとうございます。

幹事社： 同じく幹事社です。よろしくお願いします。

市長、先ほど、この4年間で頑張ったこと、子育て支援施策、全力で取り組まれたとおっしゃいました。時代も、例えば前任者が当時できなくて、福田さんが1期目できた理由というのは、要は何らかの政策判断をされたんだと思うんですけども、できた理由は、ご自身、どういうところにあると見ていらっしゃるのか。

市長： 4年前に出馬するときも、例えば待機児童の問題についても、あるいは就任した直後の会見でも聞かれたんですが、なぜ待機児童が解消できないのかと、それは、私はやる気の問題だということも4年前に申し上げました。それは、どこどこを目指して必ずやり切るんだという、リーダーですね、私が自分でリーダーと言うのもなんですが、長たる者が示して、それに向けて、当然予算も必要、予算、人というものをしっかりとつけていくということをするれば、そして職員の何ととっても努力、協力というのが必要でありますけれども、その3つが兼ね合えば必ずできると思ってきていましたし、そのことが1つ証明できたというふうに僕は思っています。

いい形で、職員のモチベーションも非常に高く、申請窓口でも、この仕事をしていて「ありがとう」ということを、ほんとに初めて言われたという職員もたくさんいましたし、そういった形でいい循環が回ってきたのではないかと思います。その分、時間外も増えたりということで、大変苦勞をかけてしまった部分もあるので、そこはしっかり改善していかなくちゃいけないポイントだとは思いますが、しかし、ある意味やる気の問題だというふうに思います。

幹事社： あと、政務の話で恐縮でございますけれども、間もなく告示が迫っております。市長から、現時点で3人のほうで名乗りを上げていますが、争点になりつつある、争点というのは双方がかみ合わない争点にならないかと思うんですが、何か争点というのが見えてきつつあるのか。あるいは、もうこれは争点になっていると思

われるような部分がおありなのかをお聞きしたいんですが。

市長： 1つは、それぞれの候補者の方たちも言われているんだと思いますが、子育ての支援のあり方だとか、財政の問題だとかの認識というのは、それぞれ多分異なっているのではないかと思います。一方は、財政はとても豊かだとおっしゃる方と、それからもう一人の方は、子育て支援にお金を使い過ぎだと言われる方というのは、非常にわかりやすい形なのではないかと思っています。それをこれからどうしていくのかというのを、どう選択しますかということもそうですし。

私は、引き続き厳しい財政状況だと、いくらほかの都市と比べては豊かだと言われても、自治体としては非常に厳しい財政状況の中で、それでも増え続ける人口と、将来迎える人口減少の中で、非常に厳しいバランスの舵取りというのが求められると思いますので、そのあたりを、どういう政策を打っていくのかということが問われる選挙なのではないかと思っています。それと、私が現職なので、私の4年間に対する継続の是非というのが絶対的な争点だとは思いますが。

幹事社： 何回もお伺いしてわかっておりますけれども、市の財政はなぜ厳しいのか、改めて、これやこれやの理由でお金が厳しいと、いま一度解説をお願いできますでしょうか。

市長： これは、川崎市だけではありませんけれども、やはり扶助費の伸びが非常に高い伸び率で増えているというのは、それは子育て支援もそうですけれども、高齢化でありますとか、あるいは障害のある方の数というのは増えていますし、そういったところの福祉的な予算、扶助費というものが非常に伸びているということが、財政を圧迫していると思います。

あとは、単年度ベースで見ますと、ここ数年間の減債基金からの借り入れというのは、これまで申し上げてきたとおり、計画的な投資というもので、単年度で出っこみ引っ込みというのはありますけれども、これは中長期の話ではないので、そこは減債基金から借りたものもなるべく早く返していくという健全財政規律というものをやっていかなくちゃいけないとは思いますが。一般論でいうと、一般論が川崎市にも非常に当てはまるというのは、どう考えても扶助費のところ急激な伸びのところだと思います。

幹事社： あと、幹事社としての質問の最後。マニフェスト10プラス1ということを出されまして、最初の項目で、セキュリティのことに言及されています。最初なので一丁目一番地、2期目は一丁目一番地と読んでいいのかなと思っているんですが、最初の項目に挙げられたという理由を教えてくださいませんか。

市長： あの順番が政策の優先順位というわけではありません。ただ、安全・安心というのは、私たちの日々の暮らしの中で最もベースとなるものですから、そこがない中で、子育ても、あるいは産業政策もということもあり得ないので、そういった意味での、ベースという意味での、いわゆる防災だとか治安だとかというのは、1番に挙げたということです。

幹事社： なるほど。必ずしも一番の優先順位じゃないにしろ、やはり市長としてはかなり意識を市民の方に、共有の意識づけをしたいという意味合いで前に出したと捉えてよろしいでしょうか。

市長： そうですね。それは、今年の冒頭から申し上げているとおり、やはり地域防災力の向上に特に力を入れるということを繰り返し、繰り返し。また、今年の実業の中でも反映させてきた部分というのもありますので、そこは引き続き、政策というよりも、何ていうんでしょうか、まちの最も基本的な、ベースとなるところですので、そこは当たり前としてやっていくということだと思います。

幹事社： 幹事社からは以上です。各社の皆さん、どうぞ。

記者： すいません、ちょっと細かいところ、2期目も、もし当選した場合は、引き続き子育てなんかも力を入れてというお話だった。それで、公約のほうを拝見していると、待機児童解消とかゼロとかという、あえてそういう文言は入れなかったのかなという気もしたんですけども、それというのは、ご存じのように、新基準になると、200人ぐらいもしかしたら増えるかもしれないという、ハードルが一気に上がってしまうので、なかなかそこ、解消すべきなんだろうけども、非常に難しい選択になってくるのかなということもあって入れなかったんですか。それとも、目標としてはやっぱりゼロを目指すということですか。

市長： ゼロというか、解消を目指していくことは、これは間違いありません。ただ、現時点で、昨年度ベースも、仮にという話での、いわゆる、今度の新基準の形なので、一体どのぐらいの数の方たちがというのも、まだ正確な数字もつかめておりません。そういった意味で、現時点で、目指すことには変わりませんが、何年までにゼロということ、今言い切れる状況にないかなと。むしろ、それを言ってしまうと、ちょっと無責任な言い方になってしまうのかなということです。

ですから、決して目指さないことではなくて、従来から言っているとおり、「待機児童」という言葉がなくなるまで、しっかり取り組んでいくという姿勢には変わりはありません。

記者： わかりました。それと、ごめんなさい、これ、任期最後の会見ということで、先ほど振り返られて、市民との約束はやり切ったんじゃないかなという、確かに給食とか待機児童とか、もろもろ、いろいろ、小児医療とか、確かに有言実行というか、修正を加えながらも形にしていくといった4年間だったと思うんですけども、一方で、あえて厳しい聞き方になりますけれども、行財政改革とか、そちらのほうで議会のほうから、ちょっと手ぬるいんじゃないかとか、もうちょっとやるべきじゃないか。例えば、いろんな、全体的な、全庁的な使用料の見直しとか、そういったいろんな工夫をされたりとか、いろんなことはやってこられたというのは承知の上でなんですけれども、それでもなお議会のほうから、もちろん阿部市政との比較でそういうことが出ているのかもしれないんですけども、福田市政になって行革の勢いがちょっと落ちたよねとか、そこは課題だよねという声がちよっと多いような気がするんですけど、その辺は関してはどういう反論というか、多分、言いたいことはたくさんあると思うんですけど。

市長： まず、これだけ人口が伸びている中で、前市長の時代から真剣に量的な削減というものにしっかりと取り組んできたということは評価されるころだと思います。

一方で、これからどうなるのかというと、現場感覚からすると、既に減らせる、ある意味限界までもう来てしまっているというのが実感です。むしろ、これから市民サービスを、これからも継続して、それから求められるサービスを提供していくためには、むしろプラスにして、増要素というのがこれから加わってくるということは否めないと思います。ですから、最近使っている言葉で「最適化」と、職員の最適化という言葉を使っておりますけれども、これからも見直していくということは、現業の部分でも見直していくということではございます。減要素というのはありますけれども、それほど、もう出てくる要素というのは多いとは思いません。

そのことは、議会の皆さんもよくよく承知のことだと思います。むしろ、例えばこの4年間の中でもさまざまな事件、事故というのがありました。この事件、事故に対して、どういう監査体制、チェック体制をつくっていくのかというのは、民間の活力を使えば使うほど、監査だとかチェックだとかという体制が公的な機関に求められることがいかに多いかがということがわかった、再認識した、ある意味市民の皆さんと共有できた4年間だったと思います。

こういった安全・安心にかかわることというのは、引き続きしっかりと自治体として、行政としてやっていかなくちゃならないことですので、行政がやるべき仕事とは一体、ミニマムとして何なのかということをしつかりと市民の皆さんにお示しして、

その部分の減要素になるところ、そして増要素になるところというのを市民の皆さんにしっかりとお伝えしていかなければ、市民生活は守っていけないと思っています。

そのことも議会の皆さんもよくよくご承知の上で、数的な話というのが緩いんじゃないかということをおっしゃいますが、でも、皆さんよくわかっておられると思います。いわゆる政治的なコメントというのは、それは僕にも理解できます。ただ、現状は皆さんよくおわかりのとおりだと思っています。

記者： そうすると、例えば次の4年間ということを見ると、とは言いつつ、この4年間、職員の数も減らしてきていると思うんですけど、次の4年間というのはどうですか。増やしていく場合もあるということなんですか。

市長： 部署によっては増えるという形で、なるべくこれからは増要素がそうあるわけではないので、増要素というか……。

記者： 減要素。

市長： ばんばん職員を増やしていくということは、現実的になかなか難しい部分があるので、どれだけ、仕事の進め方も含めてですけれども、仕事の改革をできるかということと、それからとにかく減らすことを目的とした行革は、それはやらないということでもあります。減らすということを大前提として、目的化してきたというのがこれまでであったと思いますけれども、数を減らすことだけを目的とした行革というは、もはやもう行革ではないと私は明確に申し上げたいと思います。

記者： そうすると、市長の考える行革というのは、いわゆる質的改革ってずっとおっしゃってこられたんですけども、目標としては、そちらのパフォーマンスをいかに上げていくかというか。

市長： そうですね。それと、やっぱり行政改革の本来の目的というのは、今掲げております総合計画で市民の皆様を示したことというのを、いかに効率的、効果的に執行体制を行うかということでもありますから、そのための減だとか増だとかということが必要だと思います。ですから、そのための最適化のための行政改革というものをこれからしっかりとやっていかなくちゃいけないなど、不断の努力はしていかなくちゃいけないと思っています。

記者： わかりました。

《武蔵小杉駅周辺のビル風の問題について》

《南武線等の混雑について》

記者： ちょっと個別のお話で恐縮なんですけれども、武蔵小杉についてお伺いした

いんですが、地元の方々が地元の人たちに行ったアンケートで、住みにくさの第1番目が電車の混雑、それから2番目がビル風というのが挙がっているんですが、これらについて、何か今後対策をお考えになるということはあるですか。

市長： ビル風という話については、当初、一番最初に建ったビルなんかは、さすがに相当なビル風があるということで認識していて、そのための、根本的な対策にはならないですけれども、補助的な対策というのはやってきました。近年建っているマンションですとかタワーは、そういったビル風のことに、構造上の問題に最初から気づいていますので、それを見据えた構造になっていますし、その対策は設計段階から相当考慮されていると認識していますし、そのための努力というのは、これは行政と民間事業者の中で相当厳しく議論してきたところであります。

それから、南武線の混雑については、引き続き武蔵小杉を中心にですけれども、相当な、危険な状態なぐらい混雑になっていると認識しています。このことについてもホームドアを含めて、混雑緩和についてJRの皆さんにも、私も直接的にお願いし、また川崎市でできることを全力でやるからということも要望しております。

ハードの整備、根本的には、解消するには、連続立体交差事業というのを現在進めているわけでありましてけれども、しかしそれを待っていても相当な時間がかかるわけで、ハード以外のソフト面の対策というのは、オフピーク通勤をはじめ、こういったところにしっかりと取り組んでいくと。来月も川崎市役所としてオフピーク通勤の、いわゆる試行実施というのをやって、全庁を挙げて、まずオフピーク通勤を自分たちでやってみると。その数というのをしっかり示して、何%乗車率を下げることができるのかということが、なるべく見える化できるような取り組みをして、そして企業の皆さんにも今お願いをしている最中ですので、企業の皆さんにもしっかりと呼びかけて、オフピーク通勤にぜひご協力をということで、川崎市行政と、それから民間事業者の皆さんと一緒に、ソフト対策にも力を入れていきたいと思っています。

記者： ありがとうございます。今おっしゃった企業というのは、川崎市内の企業。

市長： そうです。市内の企業で、特に大手企業に、まずお願いしておりますけれども、ご協力いただけるところにアンケート調査を行って、そして一緒に実施をいただけないかという協力の要請もさせていただいております。でも、まずは随より始めよということで、川崎市役所がまずそれを行うということで、今日の局長会議でも私からしっかりと各局、人数を出してということで、数値を出してしっかりと検証できるような取り組みを行うということをやりたいと思います。

記者： ハード面なんですけれども、JR側とお話をされて、JR側から、例えばホ

ームドアとかについて、具体的に何か言及はあったのでしょうか。

市長： 詳細のコメントについては、ここでは控えさせていただきたいと思いますが、けれども、しかしJRさんとしても、今の混雑状況というのは当事者として認識されていますし、安全性の確保についても非常に深い関心を持っておられると思っております。

記者： ごめんなさい、もう一点だけ。JR、さっき南武線とおっしゃったんですけれども、横須賀線も同様と考えてよろしいですか。

市長： そうですね。いわゆるホームドアだとか混雑緩和の話ですか。そうですね、オフピーク通勤については南武線のことを今回対象にしておりますが、駅整備自体については、武蔵小杉ほか、主要駅も含めて、そういった混雑についての対応については、そういう認識でお話をさせていただいております。

記者： 済みません、今の点で確認したいんですけれども、混雑の件で。混雑緩和というところで、連続立体交差事業は相当時間がかかるというふうにおっしゃいましたけれども、混雑の緩和と連続立体交差事業というのはどういう関連があるのでしょうか。

市長： まず、混雑の緩和というか、連続立体交差というのは混雑緩和だけではないんですけれども、いわゆる立体交差にすると、駅幅を広げたりすることができたりとか、いわゆるハード面で長編成化にもつながることはできますので、そういった意味での、今6両というのが、連続立体になれば、それが踏み切りでもって長編成化できないというハードルがなくなるわけでありますから、そういった意味で、結果的にはそういったことにつながるだろうとは思いますが、そういった要素もありますという意味です。

記者： 南武線の長編成化とか、あと横須賀線の武蔵小杉については、既にホームに人が入り切らないと、改札の前に行列ができているという、非常に、かなり異常な状態になっていて、住民などからは、ホームを上りと下りで分けてほしいという、そういったハードの整備についても要望が出てきています。この辺のところ、市としてできることというのは何かあるのでしょうか。

市長： いろんなハード整備については、JRとともにいろんな検討をさせていただいております。

記者： 何らかJRに対して助成するとか、用地買収について何か協力するとか、何かその辺のところは考えられているのでしょうか。

市長： 具体的なことは今ここで申し上げられませんが、ハード整備についてもいろんな議論をさせていただいております。改善に向けてですね。

記者： わかりました。

記者： 済みません、先ほどの記者さんのオフピーク通勤のこと、これは来月からなんですか、11月から始めるということですか。

市長： 来月に行います。来月からということで、ずっとということではなくてですね。

記者： 期間を区切って。

市長： 期限を区切って、まずトライしてみて、それで検証してみようということです。

記者： これはあれですか、ピークをずらすというのは、朝にずらすと、遅くずらすと、いろいろやり方、いろいろあるということと、あと職員の方の規模、どのぐらいでやるかという、イメージはあるんですか。

市長： 実際には数字は出ておまして、本庁で働く人間が何人いて、そのうち南武線を使っているのはおよそ何人で、何%の人がオフピーク通勤は可能かもしれないという数字というのは出しているんですが、その中から実際に何人参加できますかということは今募っているところです。募り始めるというところで、協力を各局に呼びかけているというところで、それをしっかり数値として、全体として挙げてもらって、それでしっかりと検証すると。

なかなか数値的な検証というのは、非常に難しいらしいんですけども、カチカチやるわけにもいかず、どうも車両の重量とか、あといろいろあるらしいんですが、量的なものをどうやって測定するのかというのは、JRさんとも協議をしているんですが、なかなか定量的な測定というのがかなり困難なようなんですけれども、ただ、何人参加して、どのぐらい効果があったのかということのを対外的に示していくためにも、どういう方法が可能なのかということのをしっかりと詰めるようにという指示はしています。

記者： これ、規模として、数百人ぐらいだとあんまり効果というか、検証できないんだと思うんですけど、結構大規模な、人数的には。

市長： 結構大規模になるのではないかなということを期待していますが、まだ呼びかけているところなので、実際何人能れるのかというのは、まだちょっと先の話になります。

記者： これは朝にずらす感じなんですか。朝というか、早朝にずらす感じですか。

市長： ピーク時間の7時半から8時半までという時間を、これ、武蔵中原と武蔵小杉の間の区間をその時間に通過するところが一番厳しいわけでありまして、その時間帯をちょっとずつずらしていくという取り組みです。前倒しするのか後ろ倒しにしていくのかというので、そこを上げていくと。

記者： これは、要するに市役所も……。

市長： これってまだ言っていないのかな。済みません、僕もいろんなところで言っているような気がしたんですけども、皆さんにはまだ言っては……。

記者： 何かオフピーク通勤、働き方改革であったような感じもするんですけども、ただ、具体的にまだ……。

市長： あ、そうですね、働き方改革のときに少し触れたという感じですね。失礼しました。

記者： これ、要するに南武線沿線の企業に呼びかけて、一緒にやりましょうよという上で、市としても取り組んでいるよという、その姿勢のほうもあるというか、姿勢というか、そういう姿勢で自分たちもやっているの、ご協力お願いしますという。

市長： まず、検証、どうなるかというのをやってみないと、お願いしますじゃ、ちょっと説得力ないので、まず自分たちがやってみて、その効果がこういう形で出せるので、皆さんも、自分たちのことですから一緒にやりませんかという呼びかけをさせてもらおうと。各大手の企業のトップの皆さんにも、私から既に何社かの皆さんにもお願いしているところもございます。

記者： 来月の試行期間では、企業も一緒にやるという感じなんですか。

市長： あれはどうだったですかね。まず市役所ですよ。

記者： まず市役所。

市長： はい。

記者： 何か先ほどおっしゃった南武線の沿線に何人ぐらいの職員の人が使われていてって、後で構わないのでクラブに……。

市長： 後で資料を提供させていただきたいと思います。

記者： 先ほど冒頭に子育て支援、なぜ福田市政ができたのかとお伺いしたところで、意思の問題、やる気で体制をつくってとおっしゃいましたが、なるほど、そのとおりにかなと思いました。今質問差し上げた南武線沿線のハードの改善の問題、連続立体も含めて、相当お金がかかるだろうと、相手のあることなので、市長も慎重に言葉を選

ばれているんだろうと思います。マニフェストの項目で、主要な項目の1つに挙げているということを見るに、次の2期目でハード面は改良すると掲げていると読んでよろしいものなのか。

市長： ハード面というか、当然連続立体交差はそんな短期間にはという話では全くないのであれなんですけれども、ホームドアですとか、そういったことについてはしっかりと取り組みたいと思っています。

記者： 2期目も何らかの形で形にしたいという意味ということによろしいでしょうか。

市長： そうですね、はい。

記者： わかりました。

市長： そんなに悠長に、4年間の中でと言っているようなレベル感の話でもないと思います。とにかく早くやらなくちゃいけないという、そういう危機感を私は持っています。ですから、それに向けての働きかけなり動きというのはやっていきたいとは思っています。

記者： 済みません、国政のことはもう聞かないほうがいいんですかね。この前何か……。

市長： そうですね。

記者： そういうことですね、わかりました。ありがとうございます。

司会： よろしいでしょうか。それでは、以上をもちまして終了いたします。ありがとうございました。

市長： どうもありがとうございました。

(以上)

この記録は、重複した言葉づかい、明らかな言い直しや質問項目などを整理したうえで掲載しています。

(お問い合わせ) 川崎市役所総務企画局シティプロモーション推進室報道担当

電話番号：044(200)2355